
LVer

Snawe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L V e r

【Nコード】

N 3 2 3 5 J

【作者名】

S n a w e

【あらすじ】

ある男の過去についてのお話。

その日は雨が降っていた。

もつとも、雨という言葉を使うのが躊躇われるほどの弱い、雨だ。

真夜中にこんな田圃道を徘徊する酔狂な人間など居るはずも無く、静かである。周囲には申し訳程度と言っていていいであろう雨音くらいしか有りはしない。

僕はふと、足を止めて辺りを見回した。

そこにあるのは、一面に広がる規則的な配置の田圃である。あとは遙か遠くに、自動車のヘッドライトが眩い国道が見当たる程度で、簡潔に言つと実に殺風景だ。

どこにもある田舎の風景と言つてしまえばそれまでであるが、僕にとってはそれがとりわけ一味違って見える。

というのも、僕にとってここは、特別などという言葉では片をつけられない、一種の因縁さえ感じるほどの場所なのである。

あれからどれほど経っただろう。

田圃道を抜け、駅前大きな通りへと出た。

とはいえ、そこにあるのは賑やかな飲み屋街でも、まして摩天楼などでも無く、数件の食事処と、民家が点在する程度である。

曲りなりにも駅前である事には違いないので、広い道幅のメインストリートと駐輪場くらいは用意されているものの、むしろそれと周囲の景観のアンバランスが滑稽なまでだ。

明かりもとうに消え失せた街の中を、僕はひたすら歩き続けていた。

歩みを止め、ここへ来て僕は暫時の呼吸を忘れるほどの胸騒ぎに襲われた。

僕にとつてはここが全ての終末であり、またある意味で始まりとも言えるだろう。

羽呉駅。

田舎町の一角にひっそりと聳える、小さな寂れた駅である。

まだ列車が何本か残っているにも関わらず、もうホームも構内も消灯してしまっている。明かりを放っているのは入り口の傍に存在する自動販売機のみ。

こんな時間に乗車しようとする人間などそう居らず、いつも駅構内には誰も居ない。

だが今日という日は、例外であった。

黒陶々の闇の中、一つだけホームに立ち尽くす影があるのだ。

どこか据えているようであり、どこにも居ないような、そんな顔をした男である。

僕は意を決して駅構内へと足を踏み入れた。

辺りを見回し、懐かしむ余裕もなくただ男の姿を探し続けた。

男の姿を探し続けていた、というと語弊が生じるかも知れない。

というのも、僕の結局の目的は決して男を探し出すことなどではない。

むしろ僕にとって、男を探し出すなどという事は不都合極まりないのだ。

男の姿を探し始めて間もなく、僕はホームに一際濃くなった影を見つけた。

それが誰なのか、僕の位置からは知る由も無いが、この時点で僕は全てを悟った。

もう、断言しても良いだろう。

僕は過去へ飛んできたのだ。理由は知らない。

どうしてそんな事が言えるかというと、至極簡単である。

あその影は、僕自身だ。終電を待っているのだ。

ああ、もう良い。とにかく悠長に心の整理をする暇などない。

早急にここを去りたいのだ。

僕は影から背を向ける。

悲壮感と絶望感に打ちひしがれている僕にとって、それは一種の自己防衛手段と言えるだろう。それほどまでに、僕の精神状態は切迫していた。

考えてみれば、あんな人生からせめてもの救いを見出すほうが馬鹿だったのかもしれない。

僕をどうしてここに仕向けたのかは知る由も無いが、神様というものの所業だとしたら残酷である。

誰が一体、何のために……

そこまで考えた時点で、僕にはふと一つの考えが浮かんだ。

突然の過去への移動、そしてホームの影、終点まであと10分足らずというこの時間……

ひょっとしたら、僕は自身の未来を改変するためにここに居るのではないだろうか？

誰かがこの事態を作為的に引き起こしたなら、少なくともそれは何か意義があるものであろう。

だとすれば、これ以外に考えられないのである。

僕は走り出さんばかりの勢いで今来た道を引き返していた。

考えてみれば、あんな人生からせめてもの救いを見出すほうが馬鹿だったのかもしれない。

絶望感に打ちひしがれ、そのままの勢いで床に倒れこんだ。

石のころにぶつけたせいかな全身に鈍痛が走る。だが、もうそんな事はもうどうだって良かった。

そうだ、これで正しいのだ。

僕はもう死んだ。本来なら息をする事も体を動かす事も、ましてや希望を持つ事などありえない。贅沢だ。

草木も眠る丑三つ時。

漆黒に包まれた静粛にて、一つの影が、ゆらゆら山へと向かって動き出す。

そうとなれば、今僕がすべき事の答えは安易に導き出せる。
彼を止める。

彼が死ななければ、僕が生きている未来が始まる。至極単純な話だ。

この先幸福に生きていける自信など毛頭無いが、それでも現在より
はずっと良い。

これは恐らく、チャンスなのだ。誰かから僕への。

思い立った僕は、再びホームへと足を向けた。

終点まであと1分とない。少しばかり急いだ方が良さそうだ。

僕は歩道橋を渡り、先ほどと寸分違わぬ場所から再び線路を見渡した。

白線の内側には、僕と同じくらいの背丈の、色濃い陰が立っている。
こちらには気付いていない。

僕は何となく彼の視界に入らないよう、存分に注意を払いながら彼
に近づいた。距離は3mとないだろう。

重厚なまでの静粛が突然、けたたましい警笛により蹴散らされる。はっと振り向く暇も無く、僕達に眩い光が照らされた。鼓動の高鳴りをひしひしと感じる。ついに、僕は動き出すのだ。

圧倒的な質量を感じさせない、甲高い轟音が響き渡る。

もはや電車は、目と鼻の先と言っても良い。

もつとも、僕は電車になど脇目も振らず、専ら彼の動向を凝視していたのだった。

不意に、彼が走り出した。

非常事態ではあるが、僕にとっては予定調和である。

僕は彼に追いつくよう、全力で走り出した。

彼との距離は約1m。四肢を伸ばせば余裕に届く距離だ。

僕は半ば飛び掛るように、彼の腕を掴んだ。

僕は半ば飛び掛るように、彼の腕を掴んだ。
はずであった。

彼の腕を掴もうとする僕の手が、彼の腕をすり抜ける。
これはつまり、走る彼を止められないという事だ。
そして僕は勢いで転倒した。急落していく視界に、線路に飛び込む
彼の姿が映る。

また、僕も同じであった。
かなりの勢いを持って転倒した僕は、僕のことをほぼ完全に無視し
て線路へと転がり込む。

耳を劈くほどの鈍音が、周囲に鳴り渡る。
それは、2つの生命が散らばり、消えて無くなる事を意味していた。

……

人間という生き物には、遠さへの執着がある。

近くにあるという事はそれを知ると言う事であり、既に近いものを退屈かつ冗長に感じるのは自然であろう。

逆説的に、知らない、若しくは失ってしまったものに対して特別な感情を抱くのもまた必然である。

死して尚、生への執着を止めない。

それは僕が生を失ってしまったからである。

死んだはずの僕は、人間として自然な行動をしていたのだ。

そして人間はその盲目的な執着のあまり、近くにあるものに気付かず、見落としてしまう事も少なくない。

かくいう僕もようやく気が付いたのであった。

僕はもう、生きていたのだと

9 (後書き)

見てくださった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3235j/>

LVer

2011年10月6日02時15分発行